

義講論原經濟

岡本正義 編
松石勝彦

不滅の古典『資本論』の現代における新しい意義に立脚し、その理論体系に即して資本主義經濟の構造と運動法則を解明することをねらいとして編集された本書は、中級程度の学習者を念頭におき要領よくまとめられたスタンダード・テキストです。



經濟原論講義

岡本 正・松石勝彦 編



有斐閣ブックス

編者紹介

岡本 正

1922年 函館市に生まれる

1944年 東京商科大学卒業

現 在 大阪経済大学経済学部教授

(主著)

『ソ連経済論』(歴史編)(編著, 日本評論社), 『現代社会主義
経済論』(共著, 日本評論社)

松石勝彦

1934年 大阪市に生まれる

1960年 一橋大学経済学部卒業

1968年 京都大学大学院経済学研究科博士課程終了

現 在 一橋大学経済学部教授

(主著)

『独占資本主義の価格理論』(新評論), 『資本論研究』(三樹書
房, 近刊)



経済原論講義

〈有斐閣ブックス〉

昭和57年11月20日 初版第1刷発行

昭和58年3月30日 初版第2刷発行

定価 2,200円

著 者	おか まつ 岡 松	もと いし 本 石	かつ 勝	ただし 正 ひこ 彦
発 行 者	江	草	忠	允
発 行 所	株式 会社	有	斐	閣

東京都千代田区神田神保町2~17
電 話 東京(264) 1311 (大代表)
郵便番号(101) 振替口座 東京 6-370 番
京都支店(606) 左京区田中門前町44

印 刷 共同印刷工業株式会社
製 本 新日本製本株式会社

© 1982, 岡本 正・松石勝彦. Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN 4-641-08436-X

は し が き

国連の「世界人権宣言」(1948年)は、第2次大戦の経験にもとづいて、基本的人権の尊重・確保が世界平和維持の条件であることを確認し、人権尊重を戦後国際社会の不動の原理とすることを誓った。

とくに、その第23条の(1)は、「何人も、労働し、職業を自由に選択し、公正かつ有利な労働条件を獲得し、失業に対して保護をうける権利を有する」こと、第25条の(1)は、「何人も、衣食住、医療および必要な社会的施設をふくめ、自己および自己の家族の健康と福利のために十分な生活水準を享有する権利」を有すること、を明確に宣言している。

しかし、今日、世界を代表する先進資本主義諸国は、この宣言の理想を実現しているであろうか。あるいは、少なくとも、その方向へ着実に前進しているであろうか。

戦後、アメリカを中心に形成された資本主義の世界経済体制は、1971年のニクソンによる新経済政策宣言を一つの契機として崩壊した。今や、世界資本主義は、「スタグフレーション」という新しい現象を前にして、有効な対策を見出しえないまま、混迷を深めている。

スタグフレーションとは、失業(不況)とインフレーションとの同時存在を意味する。伝統的な保守派経済理論は、高賃金が雇用減少の主因であるとして、賃金引下げを主張する。しかし、賃金引下げは労働者の所得減少、消費需要減退をもたらし、直ちには景気回復につながらない。しかも、インフレーションのもとでは、賃金引下げによる労働者の犠牲はきわめて大きい。

一方、従来、資本主義における経済運営の指針とされてきたケインズ理論もまた、完全に無力化している。有効需要の不足を失業の原因として需要刺激政策を展開することは、インフレーションの高進を招き、失業問題の解決以前に、経済の破滅、財政危機をもたらす危険が大きい。

現代資本主義は、まさに手詰り状態にあり、ますます深刻化する矛盾の解決策を空しく模索しながら、無暴な戦争への胎動さえひき起こしている。戦後国際社会の不動の原理とされた人権尊重、とくに、すべての社会成員の生活権確保という宣言は、空虚にさえ響く。多数の労働者とその家族が失業に苦しみ、さらに、インフレーションは、社会成員の間にきわめて不平等、不公正な経済状態を生みだしている。スタグフレーションは、生活権確保の理念だけでなく、「万人の平等」という理念をもふみにじっている。資本主義はその寿命を終ろうとして、人々の前に深刻な矛盾を露呈しているといえよう。

こうした資本主義経済の矛盾の構造は、単にスタグフレーションという現象を観察するだけでは解明されない。資本主義は、前世紀末から今世紀初めにかけて独占資本主義の段階に入り、1930年代の大不況期以来、国家独占資本主義とよばれる最終の局面を迎えている。スタグフレーションは、この国家独占資本主義の「死に至る病」であり、世界史の転換期を象徴する現象の一つである。したがって、この現象に集約的に示されている現代資本主義の諸矛盾は、資本主義を一つの「歴史的社會」として世界史全体のなかに位置づけ、その生成・発展・衰亡を体系的に把握する、マルクス経済学の方法による以外には、全面的に解明することはできない。

「経済原論」は、マルクス経済学全体系の原理論として、資本主義経済の構造と運動法則とを基本的に明らかにするものである。この原理論の根幹は、マルクスの『資本論』によって与えられている。もちろん、マルクスの時代の資本主義と現代のそれとでは、歴史的な発展段階が異なるから、『資本論』の理論体系をもって、現代資本主義の諸問題を全面的に解明することはできない。しかし、『資本論』は資本主義の一般的理論であり、そこで明らかにされた資本主義の経済構造と運動法則は、現代の資本主義にも基本的に貫徹されている。この資本主義の一般的理論の正確な理解を前提として、はじめ、現代資本主義が当面する諸問題の解明に立向うことができるのである。その意味で、『資本論』という経済学の古典は、今日なおその意義を失っていないばかりか、世界史の転換期を迎えて、力強い新たな光芒を放つにいた

っている。

本書は、『資本論』の現代における新しい意義に立脚して、『資本論』の理論体系に則した、資本主義経済の基礎理論を展開することを目標とした。執筆者は、それぞれの『資本論』研究を基礎に、『資本論』の理論体系を、自分の頭脳をとおして再構成し、整理することにつとめた。そのさい、従来の論争点、疑問点についても各自の立場を明確にし、あいまいな叙述に終ることのないように心がけた。

このような本書のねらいは、当然、高度の理論内容を要求する。その要求に沿いながら、平易、簡明な叙述によって、多数の読者の理解に資するということは、至難の業である。しかし、資本主義の現状を考えれば、経済学専攻の学生だけでなく、一般の社会人をふくむ多数の人々に、資本主義経済の原理論を理解しやすい形で提供するということは、経済学研究者の責務であろう。われわれが、自らの非力をも顧みず、あえてこの難事に挑戦した所以である。もし、多数の読者を得ることができ、また、同学諸賢をはじめ多くの人々からの、きびしい叱正、批判をうけることができるならば、望外の幸せである。

編集者は、執筆者の原稿を丹念により、疑問点を徹底的に洗い出し、執筆者に投げ返す作業を再三行なって、理論水準と叙述の明快さとの保持に務めた。意見が対立する点は、ギリギリまで調整し、執筆者が納得する点は編集者の意見が通り、執筆者の妥協しえない最後の線は執筆者の見解が通っている。編集者はその責を良心的に全うしえたことを心ひそかに喜ぶと同時に、執筆者にはご協力と寛容に御礼とお詫びを申しのべたい。

最後に、本書の企画をはじめて以来、細心の注意を払って編者・執筆者間の連絡調整に当たり、予定の大幅な遅れにもかかわらず、辛抱強く完成まで援助を与えられた、有斐閣の岡村孝雄氏ほかの方々には、心からお礼を申し上げます。

1982年9月

編 者

-----執筆者紹介（執筆順）-----

*は編者

〈執筆担当〉

*まつ	いし	かつ	ひこ			序章, 第2編はじめに, 第7章, 第3編はじめ に, 第15章, 終章
*松	石	勝	彦	(一橋大学経済学部教授)		
おか	もと	ただし				第1編はじめに, 第1 章, 第2章
*岡	本	正	(大阪経済大学経済学部教授)			
よし	むら	ゆき	お			第3章
吉	村	幸	男	(大阪経済大学経済学部講師)		
さい	とう	えい	じ			第4章, 第5章
斎	藤	栄	司	(大阪経済大学経済学部講師)		
たき	た	かず	お			第6章, 第8章
滝	田	和	夫	(桃山学院大学経済学部助教授)		
や	か	むね	ひこ			第9章, 第10章, 第11章
屋	嘉	宗	彦	(法政大学第一教養部教授)		
ず	かわ	ひろし				第12章, 第13章
頭	川	博	(高知大学人文学部助教授)			
ふく	だ	やす	お			第14章
福	田	泰	雄	(一橋大学大学院経済学研究科博士課程)		

凡 例

たびたび引用される文献は、以下のように略記した。

『資本論』——K. Marx, *Das Kapital; Kritik der politischen Ökonomie*, 3 Bde.

1867～94——は、K. で略記し、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ で各々第1巻、第2巻、第3巻を表した。ページ数は邦訳『マルクス・エンゲルス全集』（大月書店版）第23～25巻のページである。

『経済学批判』——K. Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, Erstes Heft.

1859——は Kr. で略記した。ページ数は邦訳『全集』第13巻のページである。

『剰余価値学説史』——K. Marx, *Theorien über den Mehrwert. (Vierter Band des*

“Kapitals”), 1862～63——は Mw. で略記した。ページ数は『全集』第26巻のページである。

『経済学批判要綱』——K. Marx, *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie*

(Rohentwurf) 1857～58——は Gr. で略記した。ページ数は、高木幸二郎監訳（大月書店版、全5分冊）のページである。

目 次

は し が き

序 章 経済原論の研究対象 1

- 1 資本主義的生産様式と三大階級の分析..... 1
- 2 「理想的平均」における三大階級の一般的・基本的分析..... 2
- 3 1857～62年のマルクスの経済学体系プランと現行『資本論』..... 3
- 4 経済原論の研究対象..... 5

第1編 資本の生産過程..... 9

は じ め に..... 9

第1章 商品と貨幣.....11

第1節 商 品11

- 1 商品の2要因（使用価値と価値）.....12
- 2 価 値 形 態.....15
- 3 商品の物神性.....22
- 4 交 換 過 程.....25

第2節 貨 幣28

- 1 価 値 の 尺 度.....28
- 2 流 通 手 段.....30
- 3 貨 幣.....35

◆練習問題◆..... 41

第2章 貨幣の資本への転化43

第1節 資本の一般的定式43

第2節 資本の一般的定式の矛盾.....46

第3節 労働力の売買	48
◆練習問題◆.....	52
第3章 剰余価値の生産	53
第1節 絶対的剰余価値の生産	54
1 労働過程	54
2 価値増殖過程	56
第2節 相対的剰余価値の生産	63
1 相対的剰余価値の概念	63
2 相対的剰余価値生産方法の発展	64
第3節 絶対的および相対的剰余価値の生産	73
◆練習問題◆.....	76
第4章 労 賃	77
第1節 労働力の価値または価格の労賃への転化	78
第2節 時間賃金と出来高賃金	80
1 時間賃金	80
2 出来高賃金	82
第3節 労賃の大きさと国民的相違	83
◆練習問題◆.....	84
第5章 資本の蓄積過程	85
第1節 資本主義的単純再生産—資本関係の再生産	86
第2節 資本蓄積と所有法則の転回	89
第3節 資本主義的蓄積の一般的法則	93
1 資本構成が不変の場合の蓄積	94
2 資本構成の高度化を伴う蓄積	95
3 資本主義的蓄積の絶対的・一般的法則	99
第4節 本源的蓄積—資本の歴史的生成	100
第5節 資本主義的蓄積の歴史的傾向	104

◆練習問題◆————— 106

第2編 資本の流過程————— 107

はじめに————— 107

第6章 資本の循環…………… 109

第1節 資本の三形態…………… 110

第2節 資本循環の三形態とその特徴…………… 111

1 貨幣資本の循環 $G \cdots G'$ …………… 1122 生産資本の循環 $P \cdots P$ …………… 1133 商品資本の循環 $W' \cdots W'$ …………… 115

第3節 三循環形態の統一…………… 118

第4節 流通期間と流通費用…………… 120

1 流 通 期 間…………… 120

2 流 通 費 用…………… 121

◆練習問題◆————— 122

第7章 資本の回転…………… 123

第1節 回転の一般的概念…………… 124

第2節 固定資本と流動資本…………… 125

1 固定資本と流動資本…………… 125

2 固定資本の諸成分, 補填, 蓄積, 修理…………… 127

3 固定資本と流動資本に関する諸学説…………… 128

第3節 前貸資本の総回転と回転循環…………… 129

第4節 回転期間が資本前貸や価値増殖に及ぼす影響…………… 130

1 資本の回転期間の3構成部分(労働期間, 生産期間, 流通期間)…………… 130

2 回転期間が資本前貸の大きさに及ぼす影響…………… 131

3 可変資本の回転と剰余価値年率…………… 134

4 剰余価値の流通…………… 135

◆練習問題◆————— 135

第 8 章 社会的総資本の再生産と流通 137

第 1 節 単 純 再 生 産 138

1 単純再生産の諸条件..... 138

2 貨幣流通による媒介と貨幣還流条件..... 141

3 生産と消費の関連と貨幣資本の役割..... 143

4 貨幣材料の再生産..... 145

5 固定資本の補填..... 146

第 2 節 拡 大 再 生 産 148

1 拡大再生産の諸条件..... 148

2 貨幣流通による媒介と蓄積基金の積立=投下..... 152

3 固定資本の補填と $D-R$ 問題..... 154

4 第 I 部門の不均等発展..... 157

第 3 節 再生産表式と恐慌 161

第 4 節 再生産表式とケネー, スミス 166

1 ケネー「経済表」..... 166

2 アダム・スミス..... 168

補 論 レオンチェフの産業連関表..... 171

◆練習問題◆..... 177

第 3 編 資本主義的生産の総過程..... 179

は じ め に..... 179

第 9 章 剰余価値と利潤 181

第 1 節 費用価格と利潤 182

第 2 節 利 潤 率 186

第 3 節 利潤率を規定する諸要因..... 188

◆練習問題◆..... 189

第 10 章 平均利潤と生産価格 191

第 1 節 生産部門の相違による資本構成の相違と

それにもとづく利潤率の相違.....	192
第2節 平均利潤率の形成と商品価値の生産価格への転化	193
第3節 競争による一般的利潤率の平均化・市場価格と 市場価値・超過利潤	197
◆練習問題◆.....	204
第11章 利潤率の傾向的低下法則	206
第1節 この法則そのもの	207
第2節 反対に作用する諸要因	209
第3節 この法則の内的諸矛盾の展開	213
1 概 説.....	213
2 生産の拡大と価値増殖との衝突.....	215
3 人口の過剰のもとでの資本の過剰.....	217
◆練習問題◆.....	220
第12章 商業資本と商業利潤	221
第1節 商 業 資 本	222
1 商業資本の自立化とその契機.....	222
2 古典派経済学の欠陥.....	225
第2節 商 業 利 潤	225
1 商品買取資本と平均利潤.....	225
2 売買取扱資本と平均利潤.....	228
3 売買取扱資本の回収.....	228
4 商業労働と剰余労働.....	230
第3節 商業資本の回転・価格	230
第4節 貨幣取扱資本	231
◆練習問題◆.....	232
第13章 利子生み資本と信用	233
第1節 利子生み資本	234

1	利子生み資本の規定	234
2	利潤の分割・利子率	238
3	利子と企業者利得	240
4	資本関係の外面化の完成	241
第2節	商業信用と銀行信用	242
1	商業信用	243
2	銀行信用	246
第3節	信用の役割	250
第4節	信用制度下の利子生み資本の特有な運動	253
1	貨幣前貸の区別と利子生み資本	253
2	通貨学派と銀行学派	255
3	貨幣資本と現実資本	256
◆練習問題◆		258
第14章	土地所有と地代	260
第1節	差額地代	261
1	差額地代一般	261
2	差額地代の第Ⅰ形態	262
3	差額地代の第Ⅱ形態	266
4	最劣等地でも生まれる差額地代	270
第2節	絶対地代	271
第3節	資本主義的地代の生成	274
◆練習問題◆		276
第15章	諸階級（所得とその源泉）	277
第1節	三位一体的定式	278
1	三位一体式とその矛盾	278
2	資本主義的生産様式の神秘化・物化・物神化	280
第2節	生産過程の分析のために	282
1	スミスの $v+m$ ($v+p+r$) のドグマ	282

2	$v + m$ ドグマの発生原因	283
第3節	競争の仮象	284
1	価値分解説と価値構成説	284
2	競争の仮象と価値構成説	285
第4節	分配関係と生産関係	286
第5節	諸 階 級	287
	◆練習問題◆	288
終 章	資本主義の新しい段階（帝国主義）	289
第1節	『資本論』（経済原論）と『帝国主義論』	290
第2節	独占資本主義と帝国主義	292
1	独占と金融資本	292
2	帝国主義的進出	301
3	帝国主義の歴史的地位	304
第3節	現代帝国主義と国家独占資本主義	306
1	現代帝国主義の基本的特徴	306
2	資本輸出の現代的形態としての多国籍企業	310
3	国家独占資本主義とインフレーション	312
参 考 文 献		317
索 引		323

序 章 経済原論の研究対象

1 資本主義的生産様式と三大階級の分析

『資本論』＝経済原論（以下、単に経済原論と略称）の研究対象は、まず第1に、「資本主義的生産様式とこれに照応する生産関係・交易関係」（『資本論』、略記は凡例参照、K. I, S. 12, 『全集』23 a, 8-9 ページ）である。経済原論はどの経済体制、生産様式にも通ずる広義の経済学ではなく、資本主義的生産様式のみを取り扱う狭義の経済学である。生産様式は生産力と生産関係の統一であり、資本主義的生産様式とは、生産力の一定の発展段階を前提・基礎とし、資本と土地所有と賃労働を基軸として行なう生産の仕方（様式）である。生産関係とは、人間が自然に対して働きかけ生活の糧^{かて}を生産するさいに人間同士の間で取り結ぶ関係、すなわち「人間がその社会的な生活過程において、その社会的な生活の生産において取り結ぶ関係」（K. III, S. 885, 『全集』25 b, 1122 ページ）であり、「資本主義的生産関係」とは、資本家と地主と賃労働者の関係である。また「資本主義的交易関係」とは、「資本主義的生産関係」のもとで生産された社会的生産物のこれら三大階級間の交換・流通の関係である。

経済原論の研究対象は、このような資本家、地主、労働者の三大階級間の「生産関係・交易関係」であり、「ブルジョア社会の内的編成をなし、基本的諸階級の基礎をなす諸範疇。資本、賃労働、土地所有。それら相互の関係。…三大社会階級。これら諸階級間の交換。流通」（『経済学批判要綱』、略記は凡例参照、Gr. S. 28, 大月版, I, 30 ページ）, 「生産の内的編成」（同 S. 139, 大月版, I, 146 ページ）である。『資本論』＝経済原論の「究極的目的」は「近代社会の経済的運動

法則」(K. I, S. 15-16, 『全集』23 a, 10ページ)の暴露にあるが、この「近代社会」は、「近代ブルジョワ社会がわかれる三大階級」(『経済学批判』序文)、「近代社会の骨組みを形づくる全ての三階級」(K. III, S. 632, 『全集』25 b, 799ページ)、「資本主義的生産様式を基礎とする近代社会の三大階級」(K. III, S. 892, 同上, 1130ページ)とあるように、三大階級から成り立つ。こうして経済原論の研究対象は近代社会の内的編成・骨組みをなす三大階級である。「資本と労働との現存の諸関係」、「階級諸関係」、「資本関係と土地所有関係」(K. I, S. 16, 『全集』23 a, 11ページ)と言われているように、三大階級が分析対象である。マルクスは、「私の価値、貨幣、資本の理論は、スミス・リカード学説の必然的發展であ」(K. I, S. 24, 同上, 19ページ) と言うが、まさに、スミス・リカード学説こそ基本的には三大階級の分析にほかならないから、マルクスの理論もまた三大階級の分析である。

2 「理想的平均」における三大階級の一般的・基本的分析

第2に、経済原論の研究対象は三大階級・三大範疇のすべてをふくむものではなく、単に「競争の現実的運動」(K. III, S. 839, 『全集』25 b, 1064ページ)すなわち景気循環を抽象した「理想的平均」(同上)における三大階級・範疇にすぎない。周知のように、周期的な景気循環こそ資本の現実的運動であるが、このような循環を抽象して、傾向＝トレンドを取り出したのが「理想的平均」であり、経済原論は、このような「理想的平均」における長期的傾向、「資本主義的生産の自然法則そのもの、鉄の必然性をもって作用し自己を貫徹するこの傾向」(K. I, S. 12, 『全集』23 a, 19ページ)、長期的な「経済的運動法則」すなわち生成、発展、消滅を分析するのである。こうして、経済原論の研究対象は、「理想的平均」における三大階級・範疇に限定されなければならない。ただし、土地所有はこの限定をつけてもつけなくてもほぼ同じである。

第3に、経済原論の研究対象は、「理想的平均」における三大階級・範疇のすべてではなく、単にその最も基本的、一般的なものにすぎない。景気循環を抽象した「理想的平均」における資本、賃労働、土地所有といっても、これらはいぜん、非常に多様な現実的なものの総体であり、一般的なものと特殊なもの、本質的なものと個別的・細目的なものの総体である。経済原論は、単に